

〈「社会運動論」にまつわる問いをめぐって——解題風の前書き〉

本稿は元々、私が本学の学部で所属している法学部発行の『法学周辺』51号、2020年3月発行、に寄稿したものです。文中でもふれている通り、法学部で私は、法学科の専門科目としてはおそらく稀有とあってよい「社会運動論」という通年科目を20年間担当しており、本稿は学部生にその背景にある「問い」をめぐっての「自分史」的な部分を紹介しながら、自らの学問・研究と実践との間に横たわってきたものを、少しでも伝わる形で明示しようとしています。

その試みがどれくらい形になっているかはともかく、本稿の「社会運動」を「社会デザイン」に置き換えても本質的なところはそれほど変わらないと考え（両者は私のなかでは通底音を奏でていますので当然といえば当然ですが）、またここで突き詰めようとしている課題は学部生のみならず、研究科の皆さんに向けての「問い」ともなり得ると考え、この退職記念号にも転載させていただく次第です。

自らにとっての学問とは？ また実践的研究のスタンスとは？ 社会的実践の現場と研究の場とを往復する意味と課題とは？ こうした「無数の問い」は社会デザイン(学)にとっても大切な問いであると私は考えます。

この原稿を書くにあたっては、「社会運動論」のゲストスピーカーに、畏友・大畑裕嗣明治大学教授を迎え、（私が大畑教授の明治大学での授業にお招きいただいた機会も併せ）やり取りしたことが契機となっています。「木の葉のざわめき」という表現もその時のものですし、また私の学部生時代から21世紀社会デザイン研究科創設期に至っても、たえずその姿に気づきと学びを得ながら考えてきた栗原彬先生への言及も行っており、いま考えると、奇しくも21世紀社会デザイン研究科と私との関係性を探究する文章にもなっているように感じます。

なお、転載にあたっては、最小限度の加筆修正を行っていることをおことわりしておきたいと思います。

追加情報：私の定年退職を機に、卒業生有志の方たちによる記念事業実行委員会が発足し、現在いくつかの事業が進んでいますが、その一つである私の最終講義三部作第一弾「社会運動への／からの道①草創期—編集者～社会運動・市民運動～NPO・市民活動」、第二弾「同②展開期—社会デザインとの出会い～3つのセクターを視野に収めつつ」の見逃し配信を下記で観ることができます。興味のある方はご覧ください。

このサイトから入れます。

<https://socialdesign.jp/>

<https://www.youtube.com/watch?v=sgsE9gzLIQM>

中村 陽一

【転 載】

「社会運動論」にまつわる問いをめぐって
Raising Issues Related to Social Movement Theory – NPOs and
NGOs as Social Movement

中村 陽一*
NAKAMURA Yoichi

「なぜ社会運動の研究を？」という問いは、シンプルなだけに自身の生き方の本質を問うものとして私の前に横たわっている。

一面では、それはほとんど何の違和感もない（つまりあらためて問うようなものではない）問いである。しかし、他方、（考えてみれば当たり前だが）自身の内外に存在しうる多様なアイデンティティから光をあててみれば、いくつかの点で重要な気づきと学び、そして反省につながりうる問いであることも率直に認めなければならないと思う。

つまりこういうことだ。私は30代の終わりまで、民間在野の立場で社会運動・市民運動に関わり、地域の人びとによる後の市民活動、NPO/NGOにもつながる諸活動（当時、「生活の場からの地殻変動」と私は呼んだ）と研究の場とを往復してきた。また、そこでのテーマ群を基盤として、他方では政府行政や民間企業との仕事にも携わってきた。

それらの仕事を見つめてくださった方々とはのご縁やサポートもあって、90年代前半から徐々に大学に場を移し（そうしたスタイルの教員の走りであったかもしれない）、30年近くになるものの、いまだ私にとって大学はある種のアウェイ感（これは私の仕事の仕方の基底にあるものでもある）を伴う場であり、一種の珍獣として身を置いている。そんな私にとって、なぜ社会運動の「研究」をするのか？ という問いは正直今更ながらの問いだったとあってよい。

もちろん、問いがなかったわけではない。しかし、それは、あらゆる運動の現場に出入りするときに問われる、そして自らにも問わざるを得ない、「お前は活動家なのか、それとも学者先生なのか」といった種類の問いであった。結局、いまだどちらでもないし、どちらでもありうるという禅問答のようなことしか言えないのだが、そこはギリギリ厳しく問われ、自問もしてきた。

しかし、何年前か前、授業科目「社会運動論」のゲストスピーカーとしてお招きした30年来の畏友・大畑裕嗣明治大学教授の問いは、2つの意味で私を反省させるに十分

*立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授

なものであった。一つは、「研究」という営みにもっと向き合う必要、もう一つには、学生が持ちうる問いにさらに向き合う必要である。

考えてみれば、運動の場で問われ、また自問もしてきた、要するに「お前は何者なのだ」という問いと、なぜ「研究」（これをたとえば「取材」ということばに置き換えても事情は同じなのかもしれないが）というスタンスをとるのかという問いは地続きのものである。なまじ現場とのつながりのなかで生きてきたという感覚が、そうした問いから身を逸らすことにつながっていたかもしれないというのが最初の反省である。ただし、「活動家」「編集者」「研究者」という立ち位置の相互乗り入れ（P・ブルデューの言い回しに倣うなら「編集者的研究活動家」etc.）や「コーディネーター」「ネットワークャー」「ファシリテーター」「エディター」「プロデューサー」「ディレクター」等々の存在態様をめぐっては、いやというほど議論を重ねてきたのだが。

次なる反省についてはこういうことである。もともと、「社会運動」をめぐって、学生との間には当然、果てしないほどの距離感や壁や溝があるだろうと私は考えた。であれば、まずは些末なところからでも興味を引こう、簡単にはわかり合えないという地点からスタートして、少しでも取りつく島（ビジュアル映像の重視もその一つ）をつくるようなコミュニケーションを考えようという意図が、シラバスにも表れている。シラバスを一種の広告表現のようにとらえる感覚もまたそこにはある。それはそれで必要な選択だと今でも思っているものの、しかし、それが本当に学生とのインターフェイスのつくり方として妥当だったかどうかという問いである。

これについては、既に4年目が終わろうとしているニッポン放送『おしゃべりラボ～しあわせ Social Design』（毎週土曜朝7:40～8:00）でパーソナリティを務め、ゲストとのトークを通じて、より幅広いリスナーに届く表現を追求してきた試み、舞台芸術分野（とりわけ演劇）と深く関わりつつ新しい表現の可能性を模索してきたことなどが私の現在の試行錯誤となっている。

さて、上記シラバスの文言は、「きれいすぎ（やし）ないか」という大畑さんの挑発？ に乗って以下書きたい。

私が立教大学で18年間にわたり、今では珍しくなった通年科目として続けている授業「社会運動論」は、法学部法学科の専門科目として、学部2年生以上の学生が履修できるものである。「法学部法学科の専門科目」でなぜ「社会運動論」（しかも通年4単位！）なのかというところが面白く、またこだわりどころでもあると考えて続けてきた。

すなわち、受講者の多くは、社会運動はもとより市民運動や住民運動を学ぼうと思って入学してきた学生ではない（少数の他学部学生や大学院生、科目履修生などには例外もあるかもしれない）。かなり微温的にNPO/NGOとか、市民活動といっても、おそらく事情はさほど変わらないであろう。まして社会学的な社会運動論となると、興味を持つ者さえ皆無に近いのではないか。

実はこの科目の前任者は、読者の皆さんもよくご存じのはずの栗原彬先生であり、それは遙か昔40年近く前、学部の卒論をまとめる際に先生の著作群にいつも影響されて、指導教員であった故・佐藤毅一橋大学教授（当時）に「中村君、また栗原君読んでね」とからかわれていた私にとっては、相当に緊張感を強いられることであった（ち

「社会運動論」にまつわる問いをめぐって

なみに、やはり卒論時に影響され続けていたのは見田宗介＝真木悠介さんである)。しかも、立教法学部(政治学科だが)の系譜から言えば、神島二郎、高島通敏といった頂にも連なる領域である。

佐藤先生は、南博と高島善哉という趣の異なる二人の師匠をもち(後に編集者として、目のご不自由だった高島先生の著作を口述筆記でまとめあげるといふ至福の時間を持つことになる奇しきご縁もあって)、その二側面は知らず知らずのうちに私にも入り込んでいる(ような気がしている)。半ば強引にいうなら、一つは社会デザイン、もう一つは市民社会という通底音・通奏音である。前者は後から考えればという注釈付きだが。

さらにあげておきたいこの科目の背景は、立教での私の仕事の中心が、創設準備期から携わってきた社会人対応の、学部を持たない大学院である独立研究科「21世紀社会デザイン研究科」にあるということだ。いわば社会デザインは、社会運動からスタートして市民運動・住民運動・NPO/NGO・市民活動・SB/CB(ソーシャルビジネス/コミュニティビジネス)等々に関わり続けてきた私にとって、少なくともこの20年近くは、到達点であると同時にたえず「問い」にさらされてきた「場」(再度ブルデューに倣い、「界」といってもいいのかもしれないが)でもある。

加えて、私の前歴も影響している。既に挙げた錚々たる先達の仕事、そして、幸か不幸か社会科学系の出版社にいたため、編集者としてご一緒できたこれまた曼荼羅と言っていいような世界の住人たる著者たちの仕事に接し、これと同じことは到底できないと悟った私は、(実は編集者という仕事についても、付いた師匠が偶然にも出版界において後に突出した仕事でその名が知られることになる人だったこともあって)自らが表現できる場を別に求め、同時に仕事のスタイルも抜本的に変えた。

こうした偶然の積み重ねがこの授業のバックステージには横たわっている。そこには確かに「木の葉のざわめき」がある。シラバスはその舞台、しかも公演へと誘うフライヤーでもある。そこにある「無数の問い」(これは先年、国立歴史民俗博物館で行われていた企画展示『1968年』の課題意識)にたいする私の表現は授業のなかでぐだぐだ感を伴いつつ、試行錯誤しているとりあえず述べておこう。

そして、最後に「社会運動論へのはいり方」をめぐって。本当はここが肝腎のテーマだろう。文字数のオーバーを気にしつついうなら、わたしにとってそれは、「生と分かちがたく結びついた場」「自己回復への模索の場」における表現としての社会運動への入口をたくさん用意するというに尽きる。

それは、たとえば、カウンターカルチャーという万華鏡のような表現(と同時に、ジョセフ・ヒースたちが、その帰結として批判したような消費文化への流れ)、アメリカにおける現代社会論の系譜ともつながるソーシャル・キャピタルやサードスペースの議論、横浜新貨物線反対運動という舞台から「公共性を撃つ」という視座の転換をもって現れいまも私たちに迫り続けている宮崎省吾たちの議論、今井照(『地方自治講義』)によって再び舞台に乗せられた「最適社会かコミュニケーションか」(真木悠介-松下圭一)という問い、私の現在の同僚でもあり、かつて湯浅誠とともに自立生活サポートセンター・もやいを担ってきた稲葉剛(現・つくろい東京ファンド代表理事)の新たな取り組み、多くの著作で英国の底辺から問い続けるプレイデイみかこの叫び、釜ヶ

崎で表現の場を創り続けるココルーム・上田假奈代の活動、20代で書いたという『チャヴ』に私も衝き動かされるオーウェン・ジョーンズの「知性に裏打ちされた」怒り、など枚挙に暇がないが、それらの引用で応えることは止め、私自身が紡いだことばで締めくくりたい。

かつて「野生の社会学」の可能性を見出すことともなり、生活クラブから発生した諸活動を追いかける契機ともなった岩根邦雄との出会い。そこにもう一度立ち還ることから問いを始めようとした拙稿（「岩根邦雄—『おおぜいの私』による社会運動」『シリーズ ひとびとの精神史 第6巻 日本列島改造—1970年代』岩波書店、2016年、所収）から。

「個人が集まって『おおぜいの私』さ。私と私が『交通』するところにしか連帯は生まれないと、一人ひとり異なる個人の数だけ生活クラブがあると考えた岩根の（あえていうなら）「美学」

（中略）

かつて岩根と生活クラブが、例えば「消費材」という切り口から問うた地域からの「おおぜいの私」による社会運動は、いまどのような表現を獲得できるのか、いまでも、そのヒントは、ぎりぎり本気になって学び、考え抜くことによってしか得られないに違いない。

（補）2020年度、研究休暇を取る関係で、「社会運動論」は文中にもお名前をあげた稲葉剛さんにご担当いただくことになっている。